

Just Now

英語活動ができる 担任に！

—小学校教員研修の実践例—

三浦邦子 Miura Kuniko
(東京都文京区立誠之小学校)

1. 今、どうしても必要な教員研修

小学校英語が総合的な学習の一環としてスタートして3年。全国的には、88.3%の学校で様々な取り組みの努力がなされている。しかし、各地域や学校に派遣されている外国語指導助手(ALT)だけに頼りがちな活動では、この先息長く継続していくには、限界がある。発達段階や心理的なフォローなどを熟知し、子どもたちをよりスムーズに動かすことができる担任が、英語活動をリードしてこそ、初めて、地に足のついた指導が展開できると言える。

一方で、我々小学校教師にとって、英語教育についての研修を受ける機会は、これまでなかった。英語指導に関するノウハウや、指導技術の研修とともに、ある程度の会話能力、すなわち運用力の研修も急務である。ここでは、本校でのこれまでの教員英語研修の実際を紹介し、研修のあり方について考えるきっかけの1つとしたい。

2. 誠之小学校における教員研修

筆者の学校は、平成9年度から12年度まで文部科学省(当初は文部省)の指定を受け、研究開発学校として英語活動の実践的な指導研究を行い、今日に至っている。言うまでもなく、教員の中に誰一人として英語教育を専門的に学んできた者はいなかった。

しかし、子どもたちを前にして「待った」はない。とにかく、これまで我々が受けてきた英語教育の知識や、先行研究校、民間の児童英語教育の情報などを参考にしながら、実践研究は始まった。そして、英語活動の一方の柱である「カリキュラムづくり」とともに、あらゆる機会をとらえて教員研修を進め

ていくことを共通理解とした。

英語指導力と英語運用力を、それぞれに分けて研修することは、理想ではある。しかし、それらにかかる時間があまりにも膨大で、現場で日々多忙を極める教師には、望むべくもない。

そこで、本校では、指導技術の研修をそのまま運用力の研修の機会ととらえ、ときにはオールイングリッシュの時間にして、間違ってもいいから自信をもって、コミュニケーションすることの楽しさを、教師自ら体験していくこととした。

(1) 全教員参加の“Seishi English Village”

“Seishi English Village”は、年間2回から3回、研究全体会の1つとして行う、各2時間程度の英語教員研修である。名前の由来は、第1回研修会のテーマからきた。すべての教員が思い思いに、農民に扮しての英語研修であった。

“Seishi English Village”とは、言語文化研究者である阿部恵子先生のご指導で、命名したものである。英語という外国語に触れるときには、「自分の殻を破って、気持ちをオープンにしてやり取りや活動をすることが大事である」という。服装を変えただけで、童心に戻ったり、ちょっぴり大胆になれたり、英語の世界にすんなりと入っていけるから不思議である。

阿部先生に講師をお願いしているが、ときには「ALT」や「英語部の教師」が講師の場合もある。時間内は、「すべて英語で！」を合い言葉に、毎回異なるテーマで、楽しい研修になるよう心がけて、「Seishi English Village」は現在も続いている。

以前、夏休みに行った“Seishi English Village”は、

DVD鑑賞をテーマにした研修であった。映画“My Fair Lady”の名場面を、字幕なしで聞き取って、役割を変えて演じたり挿入歌を歌ったりしながらの楽しい研修となった。このほか、様々なゲームや歌、チャンツを体験することも楽しい研修になる理由の1つとなっている。

また、各学年の英語活動を紹介し合っ、実際に活動することも、テーマの1つとして取り上げた。「学年を追って英語活動をとらえることができる」、「指導者と子どもの両方を経験できる」など、“Seishi English Village”は、英語指導力、運用力向上の何よりのよい機会となっている。



“Seishi English Village”の一コマ

(2) ミニミニレッスン

伝達などがたくさんある、朝の慌ただしい職員室のひとつときであるが、ALTからのアドバイスをもとにして、みんなで声を出す機会を週に1度、2〜3分で実施しているのが、このミニミニレッスンである。英語力のブラッシュアップ研修になると同時に、「さあ、がんばるぞ!」と、一日の始まりに、元気をもらうきっかけになる。

「あいさつ」「ちょっとした文化の違い」「ニュースや新しい話題から」など、身の回りの出来事は何でも題材にすることができる。

我々の陥りやすい英語の間違いなどもALTの目線で取り上げ、なるほどと納得させられることが多い。冠詞aやtheの使い方、否定疑問文に対する答え方での“Yes”“No”の日本語との違いなど、実際にすぐに役に立つような事例をテーマに行っている。

(3) ミーティングの時間の活用

英語活動は、学年共通の指導プランを使って、ティーム・ティーチングで行うことが多い。そのため、活動前には、学年の担任やその他の協力者との事前の打ち合わせを、欠かすことができない。

担任が立てた基本的なプランをもとにして、ALTも加わり、じっくり吟味することで、指導に対する見通しが、よりはっきりしてくる。実際に、声のかけ方や教材・教具の提示の仕方などいろいろ試すことで、指導に自信をもつことができる。こうして、互いの知恵を寄せ合い、プランに息を通わせることが、指導力の向上に大いに役立っている。ALTへの説明や質問なども、できるだけ英語で行うことが、英語運用力を高めることになるのは、言うまでもない。

ALTを、私たちと同じ目標をもつ1人の仲間と考え、「ブロークンな日本人英語でも十分」、そう開き直って、ALTとのコミュニケーションを楽しむことにより、職員室が「生きた英語研修の場」となっている。心を通い合わせた交流によって、ALTの持ち味を生かすこともでき、英語活動がさらに充実してくるであろうと考えている。

3. これからの教員研修のあり方

本校のように、研究指定校の立場を生かして全職員一丸となって教員研修を実施できるところばかりではない。今後、どの学校でも、全教員が行わなければならない英語活動の必修化も視野に入れると、文部科学省や教育委員会レベルでの研修会は、欠かすことができない。ぜひ、1人でも多くの教員が研修の機会を得て、自信をもって子どもたちの前に立つことができるようなシステムづくりを要望したい。

それと同時に、個人の努力も大事である。各研究校の実践に触れる機会は、非常に有益である。各学校なりの研究を積み重ねて作り上げた活動の流れを、実際に目にするによって参考となるものは多い。参観して得た成果の中から、「やりたいこと」や「やれそうなこと」を想定し、同じ指導案で試してみたり模倣したりして、指導力の向上に結びつくよう、さらに研修を積み重ねたい。